マメットの戦い

——自分自身への旅——

鎌　田　紘　子

Introduction

マメットの最新作*The Old Neighborhood*『昔なじみ』は、1997年4月、マサチュセッツ州ケンブリッジのヘイスティ・プディング・シアターで初演され、同年11月にはN.Y.のブース・シアターで上演されている。前作*The Cryptgram*『暗号』(1994年)において、マメットは自分の少年時代の孤独感を浮きぼりにしたが、『昔なじみ』は、同じく自伝的要素ながら、ユダヤ人としてアメリカ社会に生きることの問いかけを中心に、自らの過去の屈辱的な部分に正面から取組んだ作品である。避けて通ることの出来ない問題と、ついにマメットは向き合ったといえるであろうか。マメット自身と思われる主人公が久し振りに郷里を訪ねて、三人の人物と再会した場面が、それぞれ独立した短篇劇となっている構成で、いずれもほとんど動きのない会話劇に近い形の作品である。

最初に置かれている*The Disappearance of the Jews*「ユダヤ人の消滅」は1983年3月、シカゴのグッドマン・シアターですでに初演された作品である。ユダヤ人としての自己を反映させている作品としてマメットは、この他に*Goldberg Street*「ゴールドバーグ通り」と題するラジオドラマを1985年3月4日にシカゴのWNUR局で発表している。また、1987年には、1984年頃の初演と思われる*The Luftmensch*「空気人間」の一幕劇とあわせて『ユダヤ人劇三編』と題して出版しており、今回の『昔なじみ』はその改訂版という見方もできる。しかし、他の二作はまったく新しく書かれたもので、それらと組合わせ

て「ユダヤ人の消滅」を『昔なじみ』の中に取り入れたことには、マメットなりの意図があったと思われる。

ところで前作『暗号』において重要な鍵となっていたものは、少年Johnが父親からもらい受けたナイフの持つ意味であった。不安で孤独な少年が、裏切った父親から与えられたものであれ、記念の品として大切に持ち続けてゆくのか、それとも死につながるものなのか、あるいは壊れてしまった家族の絆をここですべて断ち切って、独りぼっちの世界を切り拓いてゆく少年自身の決意を示すものなのか、暗号解読は今だに謎である。

いずれにせよ、マメット自身の内面の何かが切断されたこととの関連を、ここに読みとろうとしたのが、先に発表した『脱力する自我のゆくえ』である。マメットは、彼の中にある硬直した自己を解き放ってくれるものとして、ナイフのイメージを心の中に拡大したのではないか。切断しなければ息もつけない、それ程までに張りつめた自我からの解放を希求していたのである。

> しかし、今マメットはこの「傷つきやすい心」を肯定的に捉えようとするに至ったのである。ユダヤ人として生を受けたマメットは、歴史的社会的背景において生まれついての「弱者」であった。家庭環境においても負の体験を味わって育ってきた。今、その体験を公表し、少年時代の自伝的作品を舞台にのせるマメットである。かつての*Glengarry Glen Ross*『グレンギャリィ・グレン・ロス』にみられた肩ひじ張った強がりを止め、その弱い自分自身を認め、弱さを持った自分自身を受け入れる姿勢へと転換したのである。その上で新しい段階へ進もうとしているのではないか。脱力することへの興味を知りはじめたと言い直してもよいだろう。もともと強さとして見せていたものは、ひどく繊細な脆いものを内に抱えていたことの証明であり、その脆さ、弱さに対しての癒しと救いを求める自分を、マメットはようやく受け入れ、それが作品に投射されてきているのである。 (1)

ナイフは、現実の自分自身を受け入れることへの道を切り開いたのである。それは自分の過去へと遡り、どのように残酷な体験であろうと、一つひとつを直視し、ていねいに確認することへとつながる道である。本論では、自らの生い立ちの背景を扱った作品を通して、マメットが、自分の過去をどのように受

け入れたのか、マメットの心の軌跡を探り、自我のゆくえを追ってみたい。

Ⅰ. *The Dissapearance of the Jews*

「ユダヤ人の消滅」では主人公Bobbyが友人のJoeyとホテルの一室で話している場面から始まる。

昔の仲間との思い出をとりとめもなく話し合っている二人の間には、気のおけない者同士にみられる無遠慮なつっこみあいが続く。しかし、なつかしさとそれを素直に表わすには一種の気恥かしさがあり、逆に、ぶっきらぼうな言葉となってあらわされる。しかも、Bobbyには目下自分自身の悩みがあり、つい不機嫌になってしまうところがある。やがて告白されるのは、ユダヤ人でない妻との結婚が破綻しているということであった。同じユダヤ人同士であるJoeyには理解してもらえるだろうという気安さはあるが、それよりはむしろBobbyが結婚とはどういうことなのか、つまり男と女の根本的な問題をJoeyに何とか説明してわかってもらいたいという思いから言葉には勢いが加わってくる。一方Joeyの方は、ユダヤ人であることの誇りをBobbyにとり戻させようとして次第に興奮してくる。Bobbyの妻Laurieが彼に向って、「ユダヤ人としてあなたがずっと長い間抑圧されていると思っていたのだったら、それは自分で招いたことなのよ」'If you've been persecuted so long, eh, you must have brought it on yourself.' (P.15)と語ったと聞いたくだりで、Joeyは一気に爆発する。白人であるLaurieは、むしろ、ユダヤ人である夫のBobbyからとり残されたような気持ちを味わっていたはずであり、そういえるのは、彼らよりもユダヤ人はやりこめられても戦い返さず、彼らより高いレベルで物事をとらえる姿勢を持って生きているからなのであり、白人のような低いレベルの精神にとらわれずにいる強さがあるからだと語る。これはJoeyが自分の父親から教えられたユダヤ人としてのプライドであり、それを保って生きてゆくためにもBobbyに早くこの自分たちの生れ育った土地に戻ってくるようにと促す。Joeyはすでに亡くなった自分の父親がかつて言っていた言葉、「われわれの人生でまたユダヤ人狩りが起るかもしれない」'It will happen in our lifetime.' (P.17)をくり返し、ユダヤ人迫害の歴史的事実を忘れないように念を押すが、Bobby

はさっと、話題を変えて明日一緒に出かけようと誘う。JoeyはBobbyの気持を察して別の話をもち出すが、これはBobbyを元気づけようという意図だったにもかかわらず、Joeyの自慢話になってしまう。自分が立派な体格の持ち主でいかに力持ちかということを語るとき、無邪気でうれしそうな様子である。何の道具も使わず、自分の手だけで難なく大木の植えかえをした時の話から、本当の人生は、土を耕すことにあるのではないかと、現在の生活に対する不満へと話は発展する。そこにはユダヤ人の男性として受けついできた本来あるべき伝統的生き方を守りたいという気持ちがみられる。そしてまた、父母たちの祖国であるヨーロッパへの想いがしきりに頭によぎるのである。ヨーロッパにいるなら、今のレストラン勤めよりも、もっと自分の力を生かした仕事にもつけるだろうし、もう少しましな生活ができるのにと、迫害の歴史を恨み、同時にそうした祖国への未練を捨てきれない複雑な心境を吐露する。自分がこれから年老いてゆき、自分の人生を振り返えった時、深い後悔がおしよせてくるかも知れない。そんなことにならないようにと、自分たちのアイデンティティの確認を願うのである。

そこでBobbyは刺激されたようにハリウッドの映画界で活躍したユダヤ人の名前を挙げはじめる。「20世紀フォックス社」などの映画会社の創立者やチャーリー・チャプリンもユダヤ人だよと語るうちに、彼らの少年時代にいた近所の靴屋の思い出に話は飛んでしまう。その靴屋も今はもうなくなったしと、人生はうかうかしているとあっという間に過ぎてしまうという不安に二人ともとらわれてしまう。その思いにうながされたように、Joeyも自分の結婚は間違いだったと切り出す。時に自分の感情がコントロールしきれずに妻や子供を殺しかねないと恐れていると語り、それならいっそ殺してしまってひとりきりになり、カナダにでも飛んでいって、森の中に入って自分も死んでしまいたいとBobbyを驚かす。それほどの真に迫った言い方で自分のファンタジィを語る時、どれ程生活が満たされていても、人間は精神の自由を求めてやまない存在であることを、相手にしみじみ悟らせる。そしてまた、そこには現代社会に追いついて生きてゆくことに疲れはてた彼の姿と、その中で少しでも頼るものを見つけ、それにすがって生きてゆくほかはないという一種の諦念にも似た気持が続いて語られる。

何に頼るのか、帰えりつく所はユダヤの教えであり、その儀式であるという。

Joeyは最近妻と一緒にユダヤ教会に加わったと語る。

この二人のやりとりは、時に激しく高まっては次に和やかな思いやりのトーンが訪れるという、マメットの得意とする音楽的手法が効果的に用いられている。最後は、Bobbyのかつての恋人Deenyの近況をJoeyがさりげなくBobbyに伝える終楽章の形で余韻を残す。二年程前に離婚して、現在デパートの化粧品売場で働いている彼女は、昔とぜんぜん変っていない様子だと語りながら、そういえばBobbyもJoeyもお互い以前と同じだな、と不思議に納得して笑い合うのである。

アメリカ社会の中に離散し埋没してしまったユダヤ人の昔の仲間ひとりひとりに思いを巡らせ、もはやユダヤ人は消えてしまったというのがタイトルの由来である。この新天地で生きてゆくためには、自分たちの文化を引きつぎ、伝統的な生き方を貫ぬこうとすることには無理があり、ある意味で同化せざるを得ないのが現実でもある。あるいは、そのような現状から抜け出して、どこか他の世界へ行ってしまうことこそ理想であり、更にはユダヤ人、そして人間は消えてなくなった方がよいという願望がこめられているともいえる。しかし、この作品の最後は、BobbyもJoeyもタバコを吸いたいと思うが、どちらも買いにゆこうとはしない場面で終る。買いにゆかないでがまんするのは、たいしたことだよと言って二人はうなずきあうのである。現状からとび出したいという欲求にかられながら、結局はタバコを買いにゆくことすらしない。閉塞状態の中でじっと耐えてゆくことを受け入れる。自嘲を含みつつかすかな夢、実現しない理想を胸にたたみ込んでいるユダヤ人としてのマメットがここにいる。

Joey: I wish I had a cigarette.
Bobby: Yes, I do, too. (*Beat*)
Joey: You wanna go get some?
Bobby: I almost do, but I shouldn't.
Joey: No, I shouldn't either. (*Pause*) Isn't that something?
Bobby: Yes, It is, Joe. (2)

ユダヤ人であることの意味を、マメット自身の中で再確認する過程を経験し

たからこそ15年近くの年月の後に、新しい形で発表する決断をした作品である。

マメットは自分の生い立ち、家庭環境、両親のこと、そしてユダヤ人としてアメリカ社会で生きることなどについて、その経験を1986年出版の最初のエッセイ集*Writing in Restaurants*を始め、*Some Freaks* (1989年)、*The Cabin* (1992年)、そして1996年には*Make-Believe Town*の中で、それぞれ断片的に語っている。雑誌や新聞などでも印象深いエピソードを通して自らを語ることは比較的多い作家といえよう。彼自身の回想によれば、ユダヤ人の両親の教育方針は、ユダヤ教の教えとその戒律を忠実に守るということよりは、まず新天地に同化し、より豊かな生活を築くことを最優先にすることであった。伝統というものとは無縁であったという。家の中には古いものは何もなく、何の色もない。自分たち自身の文化的遺産を軽視しており、教えられた美徳は、創造的たれというより改善的、修正的たれというものであった。

> I was raised in a typically American environment. My parents were not interested in preserving their European heritage and were enthusiastic in their complete dedication to the materialistic values of American society. At home everything was defined negatively: let's stop being poor, let's stop being Russian, let's stop being Jews. I mean, all these three terms together give most Americans a substantial headache, right? And that abandonment of any sense of community and collective social goals depresses and frightens me. (3)

ユダヤ人であることを止めよう。貧乏であることをやめよう。この激しく強い親の期待は兄妹に強迫観念を植えつけ、緊張を強いるものであった。

マメットの父バーナードはユダヤ系移民の二世であり、母レノーラもロシアからのユダヤ系移民の出身である。父方の祖父母はポーランドから身ひとつで逃れてきたのであり、当然生活は貧しいものであった。しかし父は弁護士になりやがてシカゴに一戸建ての家を持つほどの、いわゆる知的中産階級に属する家族を作り上げたのである。

しかしマメットが10才の時にこの両親は離婚する。しばらくは母と妹との

三人の生活が続いたが、やがて母が再婚して、新しい父との生活に入る。しかしこの人はユダヤ人ではなかったため、マメットは一層ユダヤ的環境から引き離されて暮らすことになる。だがどうしても馴染めなかったこの父から逃れて、実父のもとに移った17才からの環境は、母の再婚家庭よりはるかに恵まれていた。マメットは名門の私立学校に通い、そこで演劇との出会いもあった。中産階級の息子として、そして新急進派であるユダヤ人の良い子として大学に進む。しかし、その後の長い年月は、「アメリカにいるユダヤ人は透明な存在で確かに存在するのに目には見えなくなっている」と自己の存在についての懐疑を一層深くしてきたといえる。

アメリカン・レパートリィ・シアターの舞台監督であるArthur Holmbergとの対談でマメットは、アメリカで生きるユダヤ人としての自らの苦悩を、この劇の中で直接さらけ出したと語っている。

H: Although they both try, neither Bob Gold in *Homicide* nor Bobby Gould in *The Old Neighborhood* seems to be able to find any kind of meaningful way to be Jewish in the United States although they both try. Why do they fail?

M: Because they're Jewish in the United States.

H: You're saying it's impossible to be Jewish in the United States?

M: No, it's not impossible to be Jewish, but it's difficult to be Jewish and to come to grips with it. This problem is explored in the plays. (4)

The dramaturgical structure of *The Disappearance of the Jews* mirrors perfectly its thematic concerns. If the conversation and mood recall Chekhov, the sense of stasis and the rhythm of the dialog reflect Beckett. (5)

94年に再婚したレベッカとの間に娘が誕生し、マメットは家族三人でユダヤ教の戒律に従う生活をしているという。失なわれたものを掘り起こす旅を続け、マメットはようやく心の寄りどころを得たのである。だからこそ、この作品をユダヤ人としての自己について、以前より一層深い確認の上で表出しているのである。

Ⅱ. *Jolly*

『暗号』においては、両親が離婚した時のマメットの不安な孤独感が投写されていたという意味で、自らの過去と向きあう作業がなされているが、二作目「ジョリー」においては、母親の再婚とその相手の家族と一緒の生活とが実話に近い形で語られる。この家族が身をもって経験した残酷な歴史がいかにマメットとそして特に妹リンに深い傷となって残っているか。ジョリーはリン本人の姿と重なり痛切なまでに細部が再現されている。マメットは、他人には一番触れられたくないはずの家族の恥辱的な部分をどうしても一度は描き出し、その過去と正面から向きあい、そして自分が立ち直る作業にとりかかったのである。

母親が再婚してから、マメットは新しい家族と、生まれた町に隣接する新開地で生活を始める。母親の再婚相手にも離婚歴があり、週末には継父自身の子供も自宅に預かる取り決めになっていた。この新しい「寄せ集め家族」が常に落ち着かなかったのは、彼らの継父が、腹を立てると暴力的になるからであった。その度に家中は混乱に陥り、ことの善悪も真実も主張できないまま母と二人の連れ子が継父の顔色をうかがいながら息をひそめて暮らしたのである。

The round table was of wrought iron and topped with glass; it was noteworthy for that glass, for it was more than once and rather more than several times, I am inclined to think, that my stepfather would grow so angry as to bring some object down on the glass top, shattering it, thus giving us to know how we had forced him out of control.

And it seems that most times when he would shatter the table, as often as that might have been, he would cut some portion of himself on the glass, or that he or his wife, our mother, would cut their hands picking up the glass afterward, and that we children were to understand, and did understand, that these wounds were our fault.

So the table was associated in our minds with the notion of blood. (6)

マメットはこうした環境から逃れて、週末には市内に住む実父に一人で会い

に出かけた。兄の留守中、継父の暴力の標的にされたのは妹のリンであった。時には母までが虐待に加わった。その母自身も幼少期に実の父親から暴力をふるわれたという祖父母から孫の三代にわたる暗い秘密を、マメットは後年、妹から詳しく聞かされる。マメット自身は、高校の途中から実父のもとで暮らすことになり、自分だけ逃避してしまった負い目を長年ひきずってきた。この痛みを総括するために、過去と向き合い、妹本人の心の傷をていねいになぞるという作業を始めるのである。

「ジョリー」では、BobbyはBobという呼び名で登場し、妹のJollyの家庭を訪ねる場面から始まる。第一場は夜のシーンで彼女の夫Carlも同席している。あまり要領を得ないJollyの語る言葉から、次第に明らかにされてくる話は、自分たちの母の死の経緯と、この母がBobたち二人の子供を連れて再婚した相手、つまり自分たちにとっては義父にあたる人物の様子である。この父、そして母さえも、精神科のカウンセリングを受けるという、アメリカ社会ではそう珍らしくない混成家族のかかえる問題が描かれる。二人が再婚した時、義父の方にも子供があり、親の都合で突然ある日から彼らと一緒に暮さなければならなくなったJollyのショックと混乱ぶり、そしてそれ以来生涯彼女の心の中から消えることのない痛み、心の傷跡が語られる。

舞台には登場しない母親とその再婚相手の義父の人物像が、この兄妹の話を通して明確に浮かびあがる。Jollyの話しぶりからは彼女の神経が不安定でぎりぎりのところで持ちこたえているさまが伝わってくる。

母親が病気になり死が近づいた時になって義父が母親を見捨てたため、Jollyは子供二人を連れて病院に泊りこみで看病しなければならなかったこと。この母の残した財産はかなりのものであったにもかかわらず、この義父がJollyに財産分与をせずに不動産全部売りはらったこと。Jollyの家族が引越しなどで現金が欲しい時に、目下お金は信託銀行に入っていて引き出せないと断わってきたこと、などが語られる。子供の時にこの義父はおろか実母からも愛されたことはなく、むしろ虐待といえるものを受け、それが母の死後も続くのである。

二場は真夜中になっても兄妹の話が続いている場面で、Carlはすでに寝室にひきあげている。兄妹はそれぞれ自分の記憶するクリスマスの情景を、母親の

口まねをして再現する。一緒の家で生活した者の間にのみ通用する会話であり、ここにCarlの出番はまったくない。ユダヤ人の母親が結婚した今度の相手はユダヤ人でなかったため、この家ではクリスマスが祝われ、当然クリスマスプレゼントは子供にとって最大の出来事であった。ところが、子供が欲しがるものを何故か二人とももらったためしはない。Bobはリバーシブルのレインコートが気に入らずデパートに返えしにいったことがある。何と取りかえたのか思い出せないが、その一年間は母親から、「あのレインコートはどうしたの？」ときかれて嫌になり結局、デパートにもう一度行って買いもどすために手間どったことなどみじめな思い出を語る。Jollyもある年、スキーが欲しくて仕方がなかったのに、赤い皮の鞄を与えられ、思わず彼女は「そんなの欲しくない」と言ってしまった。そのためせっかくのクリスマスを台なしにした恩知らずの子供と叱られたことを、苦にがしく思い出している。彼女はその鞄を3、4年間、毎日、本を一杯入れて学校に持ち歩き意地を示したのだった。子供を本当に愛していれば、親は子供の本当に欲しいものが判るはずである。自分たちの親は決定的にその気持がなかったのだ。その上、プレゼントが気に入らなければ取り代えてよいと、商標をはずさずに寛容な態度をみせながら、心の中では絶対に親に服従させようとする執念深さがあったのだ。JollyがCarlと結婚することを決めた時も、両親ともCarlはふさわしい相手ではないと反対した。確かにそれほど優秀という人ではないが、自分はそれなりに幸せな結婚生活をしており、子供についても、充分に愛しているから、子供が欲しいものが何であるかを把握しているつもりだとJollyは話す。家族のために料理の腕もあがったし、それを娘にも教えている。子供がやがて母親からこんな風に教えられたと料理法を自慢げに人に語ってくれたらという、自分には出来なかった夢を子供には実現させたいと願っているのである。週末には子供の友人を泊らせポプコーンやパンケーキをつくったり、映画を借りてきて一緒に観せてあげたり、自分の子供時代にして欲しかったことを今、自分の子供には出来るだけ沢山体験させようとしているのだ。

ある年、母親が自分たちの所へやってきて、孫たちに何を買ってあげようかときくから、「子供たちには靴がいるんです」と言ったのに、母親は高価なvanity setという机を買ってきたりするのである。ことごとく噛み合わない相手であるこの母親が最近、夢にあらわれたと言いかけながら、Jollyは、ふと

我にかえり、Bobに自分たちを訪ねてくれたことに感謝の気持を伝える。Bobも長年、妹をいわば見捨てたような形のまま過ごしてきたのに、今、自分の方が慰めて欲しい時になってやっと会いに来るなんて何と手前勝手だろうと詫びる。そしてBobは、自分の結婚が破綻しており、妻と別居中であるが、彼のことを案じるJollyに対して、妻のもとには戻らないと決意をのべる。Jollyは兄の決断に喜んで賛成するわけではないが、自分にとって一番よいと思うようにするしかないのだけどと言った後、しばらくして彼女の夢みる充実した人生のイメージを語る。子供をワゴン車に乗せてある道を走っていると、男性が目の前に現われて、「知らないのか、この道は一方通行だぞ」と叫んでいる。自分はそんな危険なことをしていたなどということはどうでもいい。一方通行と知っていたかどうかも問題ではない。こんな自分に対して夢中で警告してくれる、この男性に自分が興奮してしまっている姿であるという。この彼女の胸の奥深くに秘められた願望は、ただ空回りするばかりでBobにとって励ましの力にはならない。

第三場は翌朝である。CarlもJollyも、Bobが昨夜はよく眠れたかと何度も確認するように問いかける。眠りに対するこだわりは『暗号』でも描かれているマメットの究極的ないやしへの願いである。

Carlは義父が送ってきた20年前の無効になった小切手の束をBobにみせる。今はただの紙くずにしか過ぎないものを、義父が家を売った時に、Jollyがそれをどれほどもらいたかったことかと悔しがるCarlに対してBobは自分の無力感を味わうのみである。

仕事に出かけるCarlにBobは感謝と別れを告げた後、Jollyとの話は自分たちが実の両親と過ごした日々へと飛んでゆく。父がよくつれていってくれた思い出の場所の数々。そしてレストランで食べたなつかしい味を数えあげるJolly。そこでBobは今更ながら、自分ひとりだけその父の元にもどって暮らして、この妹の所には会いに来なかった自責の念にかられる。

Jollyはゆうべ話しかけて結局語らずに終わった母親の夢の話をもち出す。この夢に、母親とそして義父とその子供たちが現われて、彼女の家の戸を叩いている。「中へ入れてちょうだい」と一番甘い声で母親が呼んでいる。彼女は殺されるとわかっていたけど母親が「あなたは私の子供よ。私があの人たちから守ってあげる」と何度もいうので戸を開けると、そこに明らかに殺意をもっ

たこわい顔の母が立っていたのだと語る。夢でよかったと胸をなでおろすBobとJollyの間に、お互いをいたわる気持ちが交いあう。過去を一緒にふり返える中で心が穏やかになったJollyは、忘れ物を取りに帰ってきた夫に、「私は大丈夫。Bobがしばらくいてくれるから。だって彼はあのころ、あそこにいた人だもの」'Bobby will be here a while, you see. And he's the only one who knows. (*Pause*) 'Cause he was *there* . . .' (P.85) という。昨夜の彼女のように「あなたは、一緒に暮らしていなかったから」'You weren't there . . .' (P.47) とBobを責めるような、一方的な被害者意識は消えている。

自己破壊とのぎりぎりの境界線をさまよう妹の姿を、克明になぞり進めてきた時、やっと到達したのは、妹の痛みをマメット自身のものとして獲得したことである。そのことによって罪の負い目から解放され、妹からの許しと和解を初めて求める態勢が整ったのである。

Ⅲ. *Deeny*

三作目の*Deeny*「ディーニー」はBobがかつての恋人と再会する場面から始まる。レストランで話をしている二人の会話は、「今夜は霜が降りると予報で言ってたわ」という天気の話である。あたりさわりのない話題を進めているように聞こえながら、切りつめられた言葉の運びが適度な緊迫感を与えるとともに、詩的なイメージが言葉によって次々に喚起される。霜の話から家に庭があって植物を育てることが出来たらという長年の願望へと連想はとんでゆく。霜よけにたくいぶり火の情景が彼女には、植物を寒さから守るこういう作業がやはり自分の中に愛の精神を呼びさますという。それに霜の朝、コーヒー片手にタバコを吸いながら、自分の植えた木などをながめている時が自分にとって一番満ち足りた思いがするという。そこから促成栽培の話に移り、ラジエイターによってもっとも完全な環境の中で種から発芽させるやり方へとDeenyはひとりで話を進める。科学の進歩によってこの世界にもたらされた効率と、しかしなおそれだけでは説明できない何か神秘的なものが残されているのではないかと続ける。

人生の中で何が確実なものなのか、絶対的に信じ頼ることの出来るものはあるのかと、必死に模索している彼女の現在の精神状況が次第に伝わってくる。

東洋の宗教には、科学では説明できない“第三の目”ともいうべき特別な神経があるという。もちろんそこには、特別な精神修養をしなければ到達できないのであり、それこそが信仰というものだろうか。自分には、これこそが絶対であると確信するそういう感情さえ、最近なくなってしまったような気がすると彼女はいう。これが確実なものだと思っていたものが、次には別のものにとってかわられるので、何事にもおいそれと飛び込んでゆけない優柔不断さがある。庭仕事をして生き物を育てたら、そういう堂々めぐりからぬけ出せそうだとわかっていても、その庭仕事にさえとりかかれない怠惰な自分なのだと語る。年令を重ねるにつれて、人生における真実は実に平凡で単純なことだと思えるようになったと語る彼女に、Bobは今まで見落としていたものの価値がみえてきたということではないか、根本に愛がなければ求めても得たという確信がもてないと言葉少なに答える。

Deenyは、現在会社で計理の職業についており、順調な仕事ぶりを幾分自慢げに明るく語って、Bobの近況をたずねる。「見ての通りさ」とくわしく言わないBobの事情は先刻承知の上で、以上のようなひとりごとに近いDeenyの連想ゲームが語られてきたのである。自分を捨てて他の女性と結婚したBobが今、離婚してかつての恋人の彼女を訪ねてきている。彼女も離婚してやっとひとり立ちして生活するようになっている。二人の間に愛が再び燃えるという気配はみえないが、悲しみを知った者同士が心の奥から紡ぎ出す抑制された言葉は限りなく真実の響きをもって迫ってくる。

彼女はある種族のもつ慣習について語り出す。彼らは身体の一部に傷をつけたり、切断してしまうという恐ろしいことをする。しかし、彼らのコミュニティでは自分だけがそれを逃がれることを許さない周囲の圧力がある。どんなにおびえていても最後にはこの儀式に従うしかない。自分の身をさし出した時、それは一つの死を体験することである。「生れ出る時の痛みに耐え、そして長い年月の悲しみに耐えたあとそれは凝縮されて儀式になり、その時、その苦しみは終りになる」という言葉は、魂の中からしぼり出されたような響きをもつ。過去を見つめ、自らの心に悔いを認めた時、もう一度成長するのだと語る言葉は当然、Bobを思いやる言葉でもある。物事を断念した時に成長するという慰めが与えられるのである。このイメージは、先のナイフについてのマメットのこだわりと関連があることは言を待つまでもない。

Deeny: I was thinking of tribes that *mutilate* themselves, and it occurred to me, that, perhaps, when they *do* it, they . . . (*Pause.*) they get *pleasure* from it. Those tribes that . . . tattoo their faces, or they stretch their lips, you know, or *necks*, or the terrible things they do to their sexual, sexual equipment; but I thought, if you know that this is terrible, as you do, and know you are frightened, which is to say, you *are* frightened, and you know that *it is the community* that forces you, then might you not feel, might you not feel, as they *did* it, you see . . .: 'Yes, Yes. I surrender.' And you *die.* You undergo the pain of, the pain of, the pain of giving birth to yourself. And that *sorrow of years.* . .

Bob: ... yes I understand.

Deeny: ... that sorrow of years. Is condensed, do you see, into a *ceremony.* And then it is over. (*Long pause*) Looking at the "old thing." Looking at *regret.* What is it we hope to gain by looking at it? Do we think it *raises* us. ... ? (7)

この再会の中でかつての恋人同士は、心の底からお互いを理解したのかもしれない。最後にもう一度、霜の天気予報の話にもどって、現実の世界に引き戻される。二人の心の中では、あたかも寒い冬の朝に霜で凍りついてすべてが死んでしまったような静謐さにおおわれていたのが、ふとサクッと音がして霜が崩れ、その瞬間神々しいまでに温かいものが流れ出す。その温かさこそマメットの必要とする癒しである。

Deenyの台詞は冬の陽だまりのように静かに心の内側で燃えている。やがて霜がとけてすべての生命が復活するかすかな予感を暗示する。張りつめた一場面である。

Deeny: Well, *you* know why then, *don't* you. Because it had passed. Well. And the *things* we did. And things we said. To other lovers. And the *jokes*, the private jokes, you know, and *poignancies*; and all the revenge we foreswore, *and that we could not have.* Always, and *turning*, don't we?

Toward death—Do you think? Do you think so? (*Pause.*) And, you know, and the things we'd given up. When you elect it's consolation to grow up. And it is consolation. *But so What?* And the things we kept *till we grew sick of them.* The treasured pivots of our *world*—until. . . (*Pause.*)

Bob: 'Until one day . . .'

Deeny: *Oh yes.* (*Pause.*) I never knew what you wanted. (*Pause.*) I thought I knew. (*Pause.*) I thought that I knew. (*Pause.*) *Finally* . . . (*Pause.*) And I said. (*Pause.*) They say there's going to be a frost.

Bob: Well, then, I am sure that there is. (8)

マメットの過去への旅がこの三作を通して描かれており、彼が再生への足がかりを得たことが示されている。

マメットが女優のリンジ・クラウスと結婚したのは1977年、彼が30才の時である。次の章で触れるマメットの作品に出演することになる彼女は、子育てもしながら女優業を続け、劇団運営の役も引き受けて、常にマメットの良き理解者であった。82年に長女、88年には次女が生まれたが、その頃マメットは、『グレンギャリー・グレン・ロス』の大成功という充実した時期にあり、生活は順調にみえた。しかしその3年後にリンジとの離婚に至る。時を経ず彼はレベッカ・ピジョンと再婚する。彼女はスコットランド生れのイギリス女優で、マメットとの結婚にあたって、ユダヤ教徒になっている。これはＩ章で扱ったマメットの「ユダヤ人としてのアイデンティティの問題」に深く関わった出来事である。離婚、そして再婚にともなうストレスと自己の存在の意味に対する揺らぎがすべてマメットに押し寄せてきたのは当然である。離婚したリンジと二人の娘はロスアンジェルスへ移り住むことになり、かつてマメット自身が体験した父親不在の寂寥感を自分の子供にも味あわせることになる。離婚の痛みを子供に与えることに対するつぐない得ぬ心の傷。逃れられない宿命のように自分についてまわる祖父母以来の業のようなもの。マメットは、この三作目で、魂からの叫びを吐き出すのだ。かつての恋人を訪ねたこの場面で主人公はなぜ会いにきたのかを説明しないままであるが、その理由を彼女は強要することさえしない。

Ⅳ. *Reunion, Dark Pony, The Shawl*

親の愛情を確認したいという子供の願望を描いたものとしては、*Reunion*『再会』(1976年初演)や*Dark Pony*『黒い小馬』(1977年初演)があり、*The Shawl*『ショール』(1985年初演)もまた家族間の愛情を扱った作品である。そして『暗号』ではさらに痛切な魂の呻きが惻惻と伝わってきて一層心の闇の深さを知らされる。

ここで、マメット自身が成長過程で体験したいわゆる崩壊家庭の苦悩と、そしてまた自らの家庭も一度崩壊させてしまった心の痛みとがどのように作品の中に反映しているかを更に遡って確認してみたい。

『再会』では、久し振りに娘Carolと再会した父親Bernieが、その娘と交わす会話劇である。電話会社に勤めていたBernieは、酒酔い運転を重ねて解雇され、今は友人のレストランで働いている。退役軍人管理局やアルコール中毒者自主治療協会の厄介にもなっている身は、決して幸せとは言えないが、それでも最近結婚しようと思う相手がみつかったという。Carolには、Gerryという夫がいて、ある日彼が「あなたの娘さんの夫」と名乗ってBernieを訪ねてきて、それが再会のきっかけになったのだった。だが、素直に「お父さん」と呼んでくれない娘に父は一抹の寂しさを覚えながら、二人の会話はぎこちなく始まる。Bernieはその後再婚し息子が一人いるが、その結婚も失敗している。酒に溺れて借金を重ね、常に何かから逃れるように転々とし続けた人生だったと振り返えり、今はあるがままの自分でいられる所を得たことに安らぎを感じている。一方のCarolは、夫の会社で秘書のような仕事をしているが、夫婦仲はうまくいっていないと打ちあける。結婚と離婚を重ねる「崩壊した家族」の影響を自分も受けていると嘆くCarolに、Bernieは罪の意識や後悔の念が彼の中から消えたことはないと語り、純粋にCarolを愛しているGerryは大切な存在だと励ます。BernieはCarolと動物園に行った時のことや、爆撃機に乗った戦争の体験談などCarolと思い出話をするうちに、次第に二人の心の間隙が埋められてゆくのを感じる。Carolが4才の時にこの父と離れて以来、20年余りが経ったこの時になって突然父親を探すことに決めたのは、「寂しかった」し、「あなたは私の父親だから」とCarolは打ちとけた気持ちでBernieに語る。実に永い年

月の後に二人は夕食を共にするためレストランへ出かけるところでこの作品は終る。

Bernieがこの日のために用意しておいた娘への金のブレスレットは日付けが間違っていて、依然として娘の理想像になれない父親の姿がそこにはあるが、Carolは、このプレゼントを心から喜ぶ。しかし、これで父と娘が本当の和解に至ったのかどうか、その永続性も定かではない。Bernieは、自分にはまともな人間の側面があることを娘に示そうとして、友人がいることを強調したり、人生に失敗した先輩としてさまざまな教訓を語るなど、二人の間に沈黙が生まれるのを恐れるかのようにBernieは休みなく話し続ける。一方のCarolも不毛な結婚生活をまぎらわすかのようにタバコをしきりに吸いながら、父と娘という人並みの関係の確認こそ彼女が本当に求めていることなのにと、いら立ちの気持ちを隠せない。お互いに父と娘というロールプレイを意識しつつ家庭の神話を再構築しようと苦闘する姿がそこにある。

『黒い子馬』は、前作『再会』をニューヘヴンで上演する際に、これに先立って10分程度で上演した小品である。ここでも父と娘のみが登場し、舞台は、夜の車の中という設定である。父親がネイティヴ・アメリカンの勇者レイン・ボーイについて娘に語り聞かせていて、娘の台詞はごく短い受け答えだけである。マメット劇にしばしばみられる語り口のみごとさをうまく活かした作劇法の例である。

白人がやってくるよりもずっと以前、レイン・ボーイという勇敢な戦士がいた。鋼のような身体、鷲のように鋭い目、そして鹿のように速い足の持ち主だった。彼の無二の親友はダーク・ポニーという黒い馬だった。ある冬、戦場からの帰途、雪山の中で野営をし、故郷の妻子のことに思いを馳せながら眠りにつくが、たき火が消えてふと目を覚ますと、狼の群が彼を取り囲んでいた。この絶体絶命の危機のさなか、思わず彼は「ダーク・ポニー」と叫ぶ。やがて、遠くにいななく馬の声と共に、雪原を駆けてくる蹄の音が聞こえる。勇気を得た彼は、逃げようとする狼をとらえて闘うが、ついに精魂尽き果てて雪の上に倒れ、気を失う。雪は狼の鮮血で真紅に染まっていた。しばらくすると、彼の顔を舐めるものがあった。それはもちろんダーク・ポニーだった——こうして、憑かれたように独りで話し続ける父親は完全にネイティヴ・アメリカンの世界

に入りこんでいる。「ダーク・ポニーよ。友人レイン・ボーイが呼んでいる」という台詞を何度も繰り返す父親の話にもはや興味は失せたらしく娘は、「もうすぐお家につくわ」と現実の世界にもどっている。

ここには語り手自身が自分の理想とする強くたくましい勇者としての男性が描かれている。現実の自分自身とはかけ離れているからこそ、一層あこがれが昂じレイン・ボーイに酔いしれているのだ。そして、ダーク・ポニーと強い信頼で結ばれた関係は、やはり現実では得られないものだけに激しい願望としてせつない程に描かれる。対して娘の関心事は「お家」という只今の現在の環境である。その家とは、愛情と信頼に満ちた幸せなものなのか、そうではない反対の現実の世界なのか、はっきりと示さない所もまたマメットの作劇法の例である。しかし、父親がこれほどまでにあこがれを夢想する背景には崩壊した現実、つまり「家」を構成する人間関係の破綻がある。その底流に離婚前の父と娘の心理的不安があることは、これに続く『再会』によって明らかになる。父親から捨てられた娘が、父親に救いを求めに来た場面はすでに話した通りである。

『ショール』は、『黒い小馬』から10年近くを経てマメットが再び親と子のテーマに戻ってきた作品である。短い4幕構成のこの作品には、男性二人、女性一人が登場し、ここでは、娘と母親との関係がテーマである。50代の心霊術師Johnの所に助言を求めて訪ねてきたのがMiss Aである。Johnは、にせの霊能力者であるが、トリックの手口を知っていて、また相談にきた相手の問題を、うまくひき出すコツを心得ている。母の遺言に対する異議申し立ての相談であることを見抜いたJohnは、このMiss Aをカモにして、大金を手に入れようと自分の若い愛人Charlesに協力を頼む。二人は親密な関係であるが、Charlesの関心はもっぱらお金であり、その彼をひきつけておくためにJohnは彼の機嫌をとっている。Miss Aの母の降霊会を行い、ロウソクを灯し、呪文をとなえて雰囲気を盛り上げ、JohnはMiss Aの母の霊との接触を試みる。Miss Aのそばに母親が立っているといい、それから、母親の霊が乗り移ったかのように、Johnは、Miss Aに対する母親の愛情を示す過去の場面を語り出す。母の遺言の話になるとJohnは、急に霊視の力がうすれ、ぼんやりとした状態で夢からさめたように息をつく。ペテン師だとなじってMiss Aは怒りをあらわにして

出て行こうとうするが、Johnは必死に引き止める。そうするうちに、ふたたび母親の姿が見えるといい、「あなたをショールでくるんで、赤いショール…」とつぶやく。暗示的な場面である。母親は夜の外出から戻ってくると、Miss Aの部屋にやってきて、ショールをランプにかけて、子守唄を歌ったよねと言うJohn。否定するMiss Aに、Johnは確信を持ってショールの模様まで詳細にのべる。それを失くしたのは5年前になるかとMiss Aの答えを引き出し、そして母親は「今もあなたのことを思っている」と告げる。最後の4幕は、降霊会の翌日、Charlesは昨晩のJohnの霊能力のみごとさに魅せられて、今までの態度を一変させ、Johnの元に留まりたいと願い出る。しかしJohnは、彼女に関する情報を調べあげた上でのトリックにすぎないと、Charlesには出て行くように促す。Miss Aが訪ねてきて、遺言に異議申し立てをする決心がついたと伝え、感謝して謝礼を払いたいという。Miss Aは、母親がショールで包んだことを知っているのは、他に誰もいるはずはないのだから、「本当にあなたは母親と接触した」と断言する。Johnの応答は昨晩のような霊能力者のそれではなく、あいまいな力のないものになっているが「あなたはショールを燃やしたのです。怒って、5年前に」とつけ加えると、Miss Aもそれを認める。その後のことをたずねる彼女に対して、Johnは「知りません。私が見たのはそれだけでした」と答えるのみであった。

心霊術という神秘的な素材を扱って目先をくらませてはいるが、ここで中心をなしているのは娘と母親との確執である。それを赤いショールに託して浮びあがらせる一瞬のために他の道具立てがすべて出しつくされていると言える。

人間は成人した後までも、子供時代に得られなかったものを探し求めてやむことはない。かくも傷は深く癒されるまでの時間は長い。

Conclusion

こうしてマメットの現在までを過去に遡る形でたどってみると、それはマメットが自己をとりもどすための戦いの旅であったのだということがみえてくる。妹によれば、「それは火の輪くぐりのようだった」という程にすさまじい戦いであったことはすでにみた通りである。この戦いは劇作家としてのマメットに、自分の持つ痛みに向き合わせることを強いるものであった。しかし、心

の中にある屈折した複雑な思いを、そのまま舞台に再現することはマメットの美意識が許さない。この点に関してはすでに先の論文でも分析したが、マメットの自己確執の度合いが深まるにつれて作劇法に微妙な変化が生じていることは見のがせない。これら一連の作品ではマメットの得意とする激しく卑猥な四文字言葉の羅列は影をひそめ、詩的な叙情性がかもし出されている。

『暗号』の中で少年Johnが父親の友人と「観察ごっこ」について語る場面が描かれている。

John . . . You have to tell me the game.
Del Here it is: . . . you write down . . .
John '. . . to sharpen our skills . . .'
Del You write down your *recollections*. Of the things you've seen. During the day. Then you compare them.
John I don't understand.
Del To see who has observed the best. You observe things during the day. Then at night you write them down. To test your observation. (*Pause.*) Things in the Cabin for instance. Or the woods. And then you see whose recollection was more accurate. (*Pause.*) You see?
John See who was more accurate.
Del That's right. (*Pause.*) (9)

これは実際に毎日、夕食の時間に家族の間で行われていた言葉の訓練の一端をかいまみせるシーンで、現実は非常な緊迫感をともなう時間であったという。意味論に強くひかれていた父親が、自分を表現するための言葉を厳密に抽出すると同時に、相手の言葉のニュアンスを正確に把握するための訓練を子供にも課したのである。そのためには観察眼と記憶力を養い、観察によって得られた事実の意味を「心の耳で聞く」ことの重要性を徹底的に教えたのであった。こうして夕食の時間は激しい言葉の応酬が行われる刺激に満ちた訓練の場であり、子供に対してであれ容赦はなかった。後にマメットが「アメリカ演劇界きっての言葉の戦士」と呼ばれるに至った言語感覚は、この時期に徹底して叩きこまれた訓練のおかげであり、また4才から始めたピアノの練習は、彼独特の

言葉に対するリズム感を育む下地をつくったといえる。

「ユダヤ人の消滅」でのBobbyとJoeyの話のやりとりは、昔の仲間の人物のうちの誰であったのか、あるいは思い出の場所に関しても二人の間に記憶のくい違いがあったり、あいまいなままにされるなど、これまでのマメットの台詞の運ばせ方をこの作品においても多用している。この手法はピンターの刺激をうけて意識的に用いられており、相変わらずマメットが不条理演劇に強い関心を抱き続けていることを示すものである。短いセンテンスをとぎれなく重ね、疑問形から始めて、同じ意味の文を形を変えながら繰り返えし、その間に相手の微妙な反応を読みとり、返答を誘導していって断定へ進むというパターンは、『グレンギャリイ・グレン・ロス』に代表される膨大な言葉の量の場合でも基本的には同じであった。しかしこの作品は、圧倒的な冗舌から言葉はぎりぎりのところまで切り詰められ抑制されている。過剰な言葉の洪水の中に身をまかせて自己を隠すのではなく、解放された自己を語ろうとするならば、そのための言語は、次第にストイックな方向に向かうのである。

批評家ビグスビーがマメットのごく初期の作品 *Duck Variations*『カモの変奏曲』に対して与えている言葉は、現在のマメットの活躍を予感させる高い評価を含んでいる。

> The setting recalls Albee; the chracters, controlled by language rather than in command of it, are familiar from Pinter; the concern with figures who resist their own irrelevance and who fall naturally into routines (in the double sense of habit and performance) to control and even deny their anxieties reminds us of Beckett. But the voice is already Mamet's, as is the ironic tone and the concern for rhythm. The ironies are not pressed as vigorously as they are by Beckett, the characters not quite as solitary as they seem in Pinter. The work also resists Albee's thrust towards renewal and transcendence. *Duck Variations* was, perhaps, a five-finger exercise, but it was one that indicated clearly enough Mamet's emerging talent. (10)

背景設定はオールビーに、言葉にコントロールされている人物という意味ではピンターに、場違いさに抵抗して不安を否定するためにルティーンに堕して

いく人物への関心という意味ではベケットに似る。しかし、表現する内容はマメット独自のものを確立しており、皮肉なトーンとリズムへの関心の深さという点ではこれら三者より勝っている。アイロニーはベケットのものほど生き生きしていないし、人物はピンターのものほど孤独ではなく、再生と超越への希求という意味ではオールビーには及ばない。しかしこれは恐らくピアノの五指練習と言ってもいい作品だろうが、マメットの豊かな才能を示すには十分なものであると指摘されている。

今、マメットが自己確認の戦いの後に到達したのは、五指練習の積み重ねの末に、オーケストラの大演奏の中でピアノを鳴り響かせていたピアニストが、じっくりとソロの室内楽に打ちこんでいる姿を思わせる。

H: In D., the third segment of *The Old Neighborhood*, there is a wonderful passage in which the woman says, "Oh, yes. (*Pause.*) I never knew what you wanted. (*Pause.*) I thought I knew. (*Pause.*) I thought that I knew (*Pause.*) Finally. (*Pause.*) And I said, they say there's going to be a frost." It's a beautifully written passage. There are many such pauses throughout *The Old Neighborhood*. Like Printer and Beckett, you use pauses to great dramatic purpose. But your pauses are different than Pinter's and Beckett's, and I wondered if you could say something about how and why you use pauses and silence.

M: It's just a rhythmic device. It's like a rest. You know, if you take a rest out of any composer's work, the work's going to sound very different.

(11)

Through dialogues and monologues, the three short plays — "The Disappearance of the Jew,' "Jolly, " and "D." — allow Bobby to see the complexity of life without easy resolution. In a sense, Bobby hopes to go forward by going back. (12)

H: You said once, and this is a direct quote, that theater is a place of recognition; it's where we show ethical exchange. What would you say

is the recognition, the ethical exchange, in *The Old Neighborhood*?

M: Well, it's something very gentle. Perhaps it's on the order of one can't go home again, or perhaps not. I don't know, I hope the audience enjoys it. It's an unusual form. It would be too grand to call it a trilogy, but it's something trilological Three explorations of the same theme which make the evening partake of the dramatic, I hope, and also of the epic. Other than that, I just hope the audience has a good time. (13)

切りつめられた言葉の向うにマメットの背負っている過去という闇がある。それは彼の存在を越える程に大きいから、言葉はたじろぎ後退する。そういう形でしか反応できない。だが逆にマメットの内面を暗示する大きなアンダートーンの波がそこにあるはずなのだ。だから抑えられた言葉には〈強度〉があるのである。

かつてマメットは、エッセイ『レストランで書くこと』の中で、演技者の使命は、「人間の魂のいのちを舞台にのせること」と語った。

If we expect the actor, the theatrical artist, to have the strength to say no to television, to say no to that which debases, and to say yes to the stage — to that stage which is the proponent of the life of the soul — that actor is going to have to be trained, and endorsed, *concretely* for his efforts. (underlined mine) (14)

「人間の魂のいのち」はテレビや映画では伝わらない。それを支えるものは生きた言語表現の場である「舞台」でしかない。劇作の五指練習以来マメットは、冗舌から寡言へと彼独自の言語修行の道をたどりながら、常に「魂のいのち」を探り、見つめ、舞台に表わしてきたのである。

Text

Mamet, David. *The Old Neighborhood* New York: Vintage Books, A Division of Random House, Inc., 1998

Reunion In *Plays : 2* London: Methuen, 1996

Dark Pony In *Plays : 2* London: Methuen, 1996
The Shawl In *Plays : 3* London: Methuen, 1996

Notes

(1) 「脱力する自我のゆくえ――マメットの強さ／弱さ――」恵泉女学園短期大学英文学科50周年記念論集、P.219

(2) Mamet, *The Old Neighborhood*, P.39～40

(3) *Time Out London*, November 1986, P.18

(4) Arthur Holmberg discusses *The Old Neighborhood* with Mamet: "It's Never Easy to Go Back", *American Repertory Theatre*, Cambridge: March 18, 1997, P.1

(5) Arthur Holmberg, "*The Old Neighborhood*: Introduction', *American Repertory Theatre*, Cambridge, March 18, 1997, P.3

(6) Mamet, *The Cabin,* Turtle Bay Books, New York: 1992, P.3～4

(7) Mamet, *The Old Neighborhood*, P.97

(8) Ibid., p.99

(9) Mamet, *The Cryptogram*, London: Methuen, 1995, P.18

(10) C.W.E. Bigsby, *Contemporary Writers — David Mamet,* London: Methuen, 1985, P.33

(11) Arthur Holmberg discusses:, *American Repertory Theatre*, March 18, 1997, P.2

(12) Michael Blowen, "New Family in the Neighborhood", *Boston Globe*, Boston: April 7, 1997, p. n1

(13) Arthur Holmberg discusses:, *American Repertory Theatre*, March 18, 1997, P.1

(14) Mamet, *Writing in Restaurants*, New York: Penguin Inc., 1986, P.21